

統計

JA 新潟県厚生連長岡中央総合病院病理部の業務統計報告
—厚生連病理センター設立後40年の歩み—

長岡中央総合病院, 病理部: 病理医

五十嵐俊彦

戦前においては、病理学の目的は大学における解剖例を通してみた疾患の解明にあった。ところが敗戦後、アメリカの医学が導入され、病理学は解剖例のみならず生検材料を取り扱うようになり、臨床病理検討会 (clinicopathological conference, CPC) なども行われて、臨床とのかかわりが従来よりも一層緊密になった。しかし終戦直後の生検材料は、大学付属病院のものとは勿論のこと、学外のものも大学に送付され、病理学教室で処理されていた。ところが1955年(昭和30年、58年前)頃から学外の一般病院においても独自に生検材料を処理したいとの要望があり、各病院で組織標本を作製する施設が設けられた。新潟県でも病理センターをはじめ長岡日赤、高田県立中央病院などでは、専門の病理学者がこれらの病院に赴任して生検材料や解剖例の処理をするようになった。

新潟県厚生連においては、当初は病理学教室員が長岡中央総合病院に非常勤に出勤して標本をみていたが、常勤業務体制として新潟県厚生農業協同組合連合会病理センターを昭和46年4月(1971年、42年前)に開設し、更に、昭和56年3月(1981年、32年前)に衛生検査所として対応することとなった。施設理念は、「病院の医療機能の向上並びに診療支援として、現代医療において病理検査は欠くことのできない重要な部門であり、系統病院をはじめ広く医療機関からの機能負託に応え、以って地域医療に貢献することを理念とする。」と明記されている。初代小島國次所長(1971-89)、二代石崎敬所長(1990-7)、三代不肖筆者(1998-)が責任を任されてきた。開設後10年の節目に、初代小島先生が「新潟県厚生連病理センター 十年の歩み」を刊行され、発足よりの10年間の業務・業績を公表された(1)。当時(1981年10月6日)の新聞紹介記事において、臨床における病理検査の意義が述べられている(写真1)。更に、開設30年目において、本誌2004年版に業務統計を再報告した(2)。当施設は2004年に中越地震に見舞われ、全ての検体標本が破損し廃棄せざるをえなかった(写真2)。当施設は2005年10月に長岡中央総合病院に移管され、開設40年(移管後病理部開設8年目)の節目を迎えた。本稿において従来報告内容に最近の統計を加えて報告した(表1)。

年間細胞診・組織診検体数の年度別変化において、年間検体検査数は増加傾向が認められる(図1)。当施設を取り巻く医療環境は80年代(昭和)までは量的拡大の時代で取り扱い検体数も増加した。90年代(平成)以降は医療費抑制の時代にもかかわらず取り扱い検体数は増加した。直近8年間は系統2病院の検体を大学病理学教室に委託した為に増加が停止した。

年間取り扱い剖検数の年度別変化において、顕著な減少が認められ、現在の剖検数はピーク時の2又は3割となった(図2)。この減少傾向は全国的なもので、その原因は生前診断の進歩、承諾の煩雑さ、訴訟誘発、コスト等によると考えられる。

術中迅速診断件数は増加傾向であった(図3)。縮小手術の増加が原因と考えられる。

病理標本材料を使った遺伝子検査を導入して13年目を向えた。直近の取り扱い検体数の増加の原因は、ヒト乳頭腫ウイルス検査の増加である(図4)。

文 献

1. 小島國次. 病理センターの発足. 新潟県厚生連病理センター十年の歩み. 小島國次編. 新潟県厚生連病理センター出版, 長岡市, 1981(昭和56年); 1-2頁.
2. 五十嵐俊彦. 統計 新潟県厚生連病理センター設立後30年の歩み. 厚生連医誌 2004; 13: 105-9.
3. JA 新潟県厚生連長岡中央総合病院病理部ホームページ、アドレス: <http://www.nkp-center.jp/>

英 文 抄 録

Statistic review

Pathological statistic report during 40 years after the establishment of Pathology Center

Nagaoka Central General Hospital, Pathology Center; Pathologist
Toshihiko Ikarashi

Pathology Center of JA Niigata Prefectural Welfare Association had been established on April in 1971 (Showa 46th year), at 42 years ago, and it was registered as hygiene laboratory institute on March in 1981. The purpose of our institute was to improve and assist the modern medical function of associated hospitals contributing local medical cares. This institute was firstly managed by Kuniji Kojima, secondly by Takashi Ishizaki, and thirdly by the author. At a turning point of 10 years after an establishment, Kojima firstly published the commemorative book, named as "Achievements for ten years after the establishment of Pathology Center". After 30 years, we, further-

more, reported our statistic analysis in this journal in 2004. In this report our recent practices were disclosed.

ment of pathology, Pathology Center of Niigata Prefectural Welfare Association, statistic report, cytology, histopathology, autopsy, telepathology, image transmission, genetic examination

Key Words : Nagaoka Central General Hospital, Depart-

表 1. 業務検体数の年度別変遷

| 西暦 | 年号 | 細胞診 | | | | 迅速 | 組織診 | 剖検 | テレパ ソロジー | 遺伝子 検査 | 期間設立後年数 (移管後年数) |
|-------|----------|-------|-------|-------|------|-------|-------|----|-------------|-------------------------|--------------------|
| | | 総数 | 外来 | 検診 | | | | | | | |
| | | | | 子宮 | 肺 | | | | | | |
| 1971年 | 昭和46年 | 1497 | 1497 | | | 3321 | 23 | | | 病理センター 1(年度4/1~3/31) | |
| 1972年 | 47年 | 2571 | 2571 | | | 4030 | 49 | | | 2 | |
| 1973年 | 48年 | 3028 | 2678 | 350 | | 3919 | 50 | | | 3 | |
| 1974年 | 49年 | 3445 | 3184 | 261 | | 4237 | 60 | | | 4 | |
| 1975年 | 50年 | 3818 | 3585 | 233 | | 4750 | 65 | | | 5 | |
| 1976年 | 51年 | 4301 | 3517 | 784 | | 5281 | 52 | | | 6 | |
| 1977年 | 52年 | 4142 | 3092 | 1050 | | 5284 | 52 | | | 7 | |
| 1978年 | 53年 | 6092 | 3855 | 2237 | | 5550 | 75 | | | 8 | |
| 1979年 | 54年 | 6797 | 4213 | 2584 | | 6211 | 66 | | | 9 | |
| 1980年 | 55年 | 7944 | 4779 | 3165 | | 6465 | 64 | | | 10 | |
| 1981年 | 56年 | 8848 | 5578 | 3270 | | 7400 | 62 | | | 11 | |
| 1982年 | 57年 | 11825 | 5980 | 5845 | | 9030 | 62 | | | 12 | |
| 1983年 | 58年 | 13542 | 7156 | 6379 | 7 | 9950 | 89 | | | 13 | |
| 1984年 | 59年 | 14347 | 7903 | 6351 | 93 | 10371 | 92 | | | 14 | |
| 1985年 | 60年 | 15694 | 8532 | 6015 | 1147 | 11828 | 80 | | | 15 | |
| 1986年 | 61年 | 17773 | 9929 | 6037 | 1807 | 13828 | 64 | | | 16 | |
| 1987年 | 62年 | 20152 | 11581 | 6865 | 1706 | 13968 | 64 | | | 17 | |
| 1988年 | 63年 | 19853 | 11002 | 7463 | 1388 | 13964 | 66 | | | 18 | |
| 1989年 | 平成1(64)年 | 20629 | 11195 | 7809 | 1625 | 13643 | 46 | | | 19 | |
| 1990年 | 2年 | 21287 | 11884 | 7894 | 1509 | 92 | 15253 | 55 | | 20 | |
| 1991年 | 3年 | 24830 | 14020 | 9409 | 1401 | 100 | 16698 | 48 | | 21 | |
| 1992年 | 4年 | 26403 | 15335 | 9714 | 1354 | 131 | 18170 | 46 | | 22 | |
| 1993年 | 5年 | 27392 | 15717 | 10331 | 1344 | 96 | 19600 | 62 | | 23 | |
| 1994年 | 6年 | 27097 | 15732 | 10114 | 1251 | 98 | 17357 | 44 | | 24 | |
| 1995年 | 7年 | 26762 | 14671 | 10296 | 1795 | 85 | 17682 | 29 | | 25 | |
| 1996年 | 8年 | 28318 | 16161 | 10384 | 1773 | 106 | 17960 | 55 | | 26 | |
| 1997年 | 9年 | 29521 | 17176 | 10688 | 1657 | 109 | 17959 | 52 | | 27 | |
| 1998年 | 10年 | 29014 | 15510 | 11845 | 1659 | 113 | 18433 | 53 | | 28 | |
| 1999年 | 11年 | 30392 | 15586 | 12963 | 1842 | 189 | 18544 | 39 | | 29 | |
| 2000年 | 12年 | 31136 | 16967 | 12273 | 1896 | 238 | 19684 | 53 | | 30(年度1/1~12/31) | |
| 2001年 | 13年 | 32360 | 17350 | 13077 | 1933 | 241 | 20000 | 41 | | 31 | |
| 2002年 | 14年 | 32716 | 17228 | 13549 | 1939 | 248 | 20225 | 74 | 118 | 262 | 32 |
| 2003年 | 15年 | 32663 | 16504 | 13736 | 2423 | 208 | 20570 | 42 | 106 | 353 | 33 |
| 2004年 | 16年 | 32440 | 16334 | 13667 | 2439 | 209 | 20077 | 25 | 71 | 312 | 34 |
| 2005年 | 17年 | 30250 | 16304 | 11546 | 2400 | 208 | 19623 | 39 | 88 | 223 | 35(10/01中央病院移管1) |
| 2006年 | 18年 | 30469 | 16533 | 11501 | 2435 | 137 | 21554 | 23 | 47 | 279 | 36(2) |
| 2007年 | 19年 | 30362 | 16720 | 11218 | 2424 | 227 | 22044 | 27 | 78 | 318 | 37(3) |
| 2008年 | 20年 | 31688 | 17077 | 12203 | 2408 | 245 | 20576 | 20 | 80 | 374 | 38(4) |
| 2009年 | 21年 | 30311 | 15594 | 12439 | 2278 | 243 | 18886 | 11 | 57 | 359 | 39(5) |
| 2010年 | 22年 | 31422 | 16494 | 12750 | 2178 | 242 | 17652 | 14 | 59 | 351 | 40(6) |
| 2011年 | 23年 | 31252 | 17325 | 12210 | 1717 | 267 | 17467 | 15 | 64 | 349 | 41(7) |
| 2012年 | 24年 | 30513 | 16975 | 11944 | 1594 | 253 | 17324 | 12 | 75 | 577 | 42(8) |

注意 2000(H12)年度より年度開始を1月1日、年度終了を12月31日と変更。それ以前は、年度開始を4月1日、年度終了を翌年の3月31日としてある。

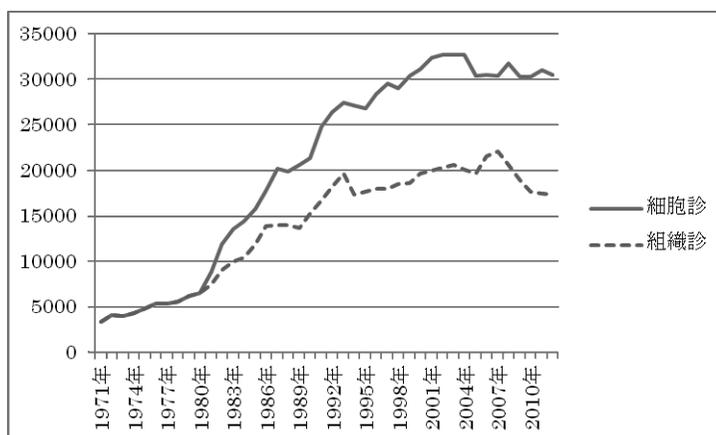


図1. 年間細胞診・組織診検体数の年度別変化

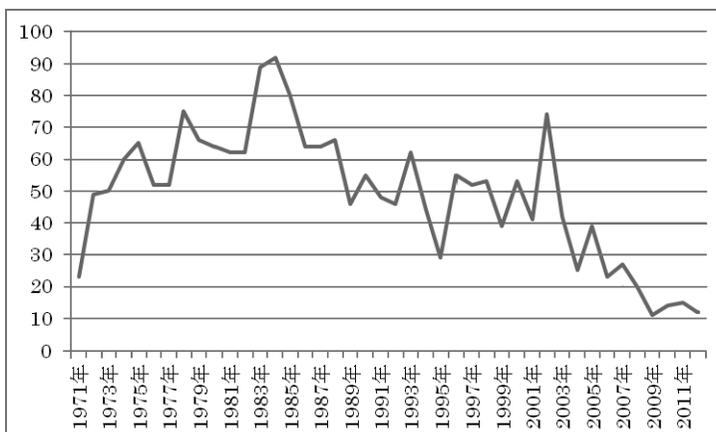


図2. 年間剖検数の年度別変化

上図：当施設、下図：日本病理学会剖検輯報データベースに基づいた全国登録施設の届出解剖総数。

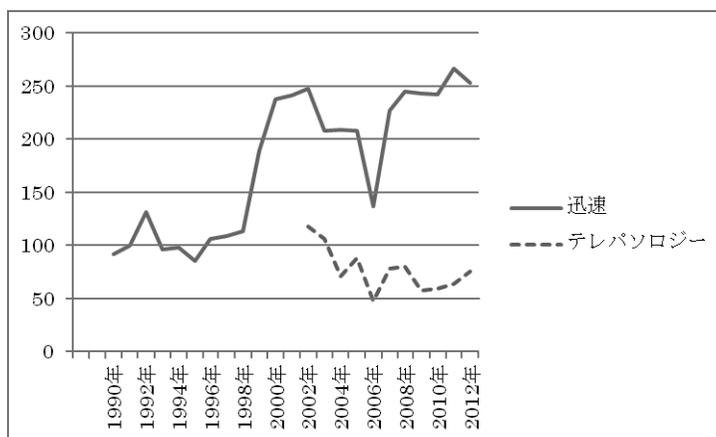


図3. 迅速検体数の年度別変化
 迅速総検体数＝3病院合計検体数（長岡中央病院＋村上病院＋柏崎医療センター）
 テレパソロジー＝2病院合計検体数（村上病院＋柏崎医療センター）
 年間迅速検体数は250件で定常状態となっている。

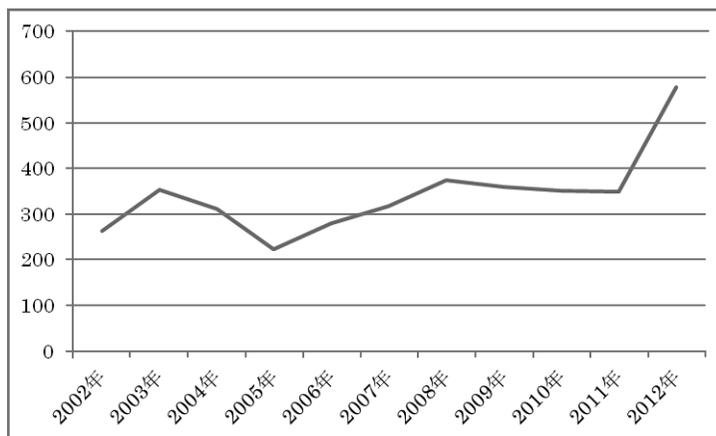


図4. 遺伝子検査数の年度別変化

病因解明に大きく貢献

創立10年の県厚生連病理センター

検査件数が年々増え業績を上げている県厚生連病理センター



臨床医の適切な診断・治療に不可欠な病理検査は、乱診乱察を防止方法として注目されているが、系統病院の病理検査をいち早く組織的に手がけてきた県厚生連病理センター（長岡市川崎一、小増次所）は創立以来十年経過した。この間に扱った組織検体四万九千件、ガンなど細胞診は三万三千件、病理解剖五百六十体に達しており、地道ながらも臨床医の適切な処置に大きく貢献、さらに医学界の先端をゆく研究も発表されるなど、他県に先駆けこのセンター方式開業が期待されている。

病理検査は、患者の組織細胞などの役割の域を越えつつあるが、戦後重視されたが、戦後重視された。その動機、病変の本質を解き明かす後になって臨床所見を裏打ちする。その動機、病変の本質を解き明かす後になって臨床所見を裏打ちする。その動機、病変の本質を解き明かす後になって臨床所見を裏打ちする。

この十年間に扱った検査件数をみると、人体の組織標本検査は三つと四万九千件、スタート年度三千三百件しかなかったのが昨年度は約二倍の六千五百件に増え、顕微鏡検査も増えている。

ガン発見に威力を発揮する細胞診も当初千五百件から昨年度千八百件と三倍強に増え、十年間、計三万三千件、また臨床検体として、病理とつながり、病理医にも勉強の機会となる病理解剖は当初二十余例から最近は七十例近くに増え、これまで五百六十体を前年検した。病変の本質を究めるため

組織検査 5 万件近く

研究分野でも業績あげる

の解剖は、遺伝とどのトラブルが付随するものか、背景を増やしていることは顕微鏡検査にレーキをかけてみるから注目される。

また持ち込まれる検査業務の傍ら、コソコソ進められた研究分野でも業績を上げていく。代表的なものには四十七年秋に発見されたスライズ組織内のアルコール腫瘍体、これはアルコール腫瘍の新たな発生生成物で従来は肝臓内のみしか発見報告はなかったが、スイス研究医の小島所長によって確認され、当初国内では抵抗されていたものの先に外国で発表され、昨年はフランスの権威アリ・サール教授の著書に同所長の研究論文引用した。

検体を持ち込む医療機関は、八割が系統内の厚生連十一病院だが、ほかに十日町、六日町、松代の県立三病院、新潟県立病院、佐渡総合病院をはじめ、中越地方を中心とする診療所、病院が三十余ある。現在の職員数は当初の三人から十一人に増え、持ち込まれる検体は毎日、結果を頭からかきとるとともに、手術中に出向いて、組織を速く迅速に病理センターにも対応している。

小島所長の話、いつの間にか十年経ったが、私としては利用がまだ少ないと思う。保険点数も改善されたし、特に開業医間がもっと活用すべきだ。

写真1. 病理センター開設10年目の新聞紹介記事 (1981.10.6付)



写真2. 病理センター鏡検室、中越地震被災当日深夜、2004年：ガラス標本マップ棚・本棚が破損した。



写真3. 施設職員集合写真、病理センター玄関脇、長岡中央病院移管前、2005年

(2013/01/22受付)